

【Side : Tigert】

「Ah〜」

神津市内のとあるライブ会場、たった1音で場の雰囲気支配する圧倒的な歌唱を前に喧嘩を売ってきた愚かな人間達が倒れ伏した。俺—茶トラ猫の獣人、ティグレ・テッセンと俺の相棒にして初恋の相手の狼獣人、ヴォルフ・セイランによるユニット、Furrythmの初バトルとしては物足りなさを覚える程のものであった。

「あつねえな。まだバトルのフェーズにも入ってねえつてのによ。」  
 ヴォルフがシャドーボクシングの真似事をしながら言った。歌でアドバンテージが取れているとはいえ、俺たちの素の身体能力は人間の同年代より少し高い程度ではないので、ムジカリウムという制度が『向こう』のものと互換性が利くもので良かったと思う。

「ありえねえ……、こんなのインチキだ！」  
 今しがた吹っ飛ばされた人間が地面にぶつかっただであろう右肩を抑えながら叫んだ。それもそのはず、バトルフェーズに入っていないのにダメージを受けただけでなく、観客の評価でも完封されているのだから。

「文句あんなら、次はオレらが先攻でやってやんよ。ま、テメェらにオレらとやりあう度胸が残ってんならだけどなア！」  
 ヴォルフが対戦相手の神経を逆撫でするような、挑発的な言い回しをわざわざ選んでそう言った。小柄でありながら力強い彼の姿は、彼に相対するか否かでその印象を二分させるだろう。もともと、俺が見ているのは後者がその目に焼き付けるであろう、荒々しくも可愛らしい

自信に満ち溢れた笑顔だが。

そう、ヴォルフは可愛い。本人（本犬？）は可愛いと言われるのを嫌がっているが、言われても仕方がないくらい可愛いのだ。懐き度の概念すら存在しないような一ファンですら卒倒するほどに可愛いのだ。あまり懐かれていなかった、出会ったばかりの頃の俺に人生のすべて捧げる決意をさせるほどに、可愛いのだ。今も懐かれていないということは言わずもがな、もし完全に懐かれてしまう日が訪れでもしたら、絶頂のあまり死んでしまうのではないかと思う程に、ヴォルフ・セイランは可愛いのだ。

「なあヴォルフ、折角だし、やりあうなら俺らの持ち曲じゃなくてこちの曲歌ってみない？俺いい曲見つけたんだー。」

あんなに可愛い表情を向けられている相手に、負けようがないはずなのに嫉妬してしまった俺はヴォルフの肩を掴みながら言った。

「おもしれえけどよ、音源持ってねえじゃん。あと、顎乗せんな。」  
 おっと、提案の穴もさりげなく顎を乗せていたことも突かれてしまったか。モフモフで肉厚な耳でパタパタと不機嫌そうに俺の顔を叩くヴォルフ。それを受けて悦に浸る俺。仮に俺が人間であったのなら、確実に警察を呼ばれるであろうこの状況も、ケモノでアイドルな以上はケモBLとしてファンに昇華され、供給という免罪符の元に赦されてしまう。『こちら側』ならではの特権だ。

「なにも俺らが持つてる曲じゃなきゃダメとは言つてねーじゃん。その人たちの持ち曲借りるとか、さ。」  
 なんとか持ち直した俺は、怯えるばかりの相手を指さして言った。彼らは音源の入った機材を抱えて後ずさりし始めた。これはもうバトルフェーズに入る必要もない。戦意喪失で俺たちの勝ち、として良いだろう。だが、熱の入ったヴォルフは物足りないのか、アカペラで彼ら

の曲を歌い始めた。

「ここからはオレたちのボーナスステージだ！お前ら、まだまだ盛り上げられるよな！？」

ヴォルフの呼びかけに歓声が上がった。名目上は創始者である俺がリーダーを務めているが、人を惹き付ける愛嬌やカリスマ性はヴォルフが持つており、俺自身彼がリーダーとなった方がいいのではないかと思うことは多々あるが、書類や実務を彼には任せられない事情があり、その事情というものもヴォルフの方も容認せざるを得ないものであるため、結局自分でリーダーをやってしまった。内容については彼自身の名譽のために閉口しておこうと思っている。

フロアの熱狂に反比例して存在感と体に入れていた力を失っていく相手から機材を拝借。この時には強奪というにはあまりにも貧弱なものだった。そして爆音で鳴り始めた音楽に背を押されたヴォルフの歌に一人、また一人と意識を失っていった。

この歌の隣に立つことが、俺の、ただ唯一の誉れだった。

#### 【Side : WoJvee】

ヌルすぎるファーストゲームの後、オレたちはヒトの群れにカメラを向けられていた。テレビ、あるいはネットニュースにでも取り上げられるのか。どちらにしろ、面倒なことになるのは分かりきっている。さっさと切り上げて帰ってしまいたいけれど、応答からは逃げられなかった。オレを先に逃がそうとしてティグレが捕まってしまったために、見捨てたい状況になってしまったからだ。本当は先に行ってしまったってもよかったのだけど、早々に非情なヤツだというレッテルを貼

られてしまったのはオレだけじゃなく Furhythm の評判も悪くなってしまう。一応世話になつて以上は、そういうところも気にしなきゃいけないことをオレはしっかり心得ている。だから、決してティグレのことが心配だというわけではない。そう、決して。

「お疲れさまでした。素晴らしいステージで圧倒されたのですが、その……」

インタビュアーの一人が口ごもってしまった。と、すかさずもう一人が矢継ぎ早に続きを話そうと前に出た。

「あまりの点差にネット上では八百長を疑う声が上がっていますが、実際のところ、どうなんでしょうか？」

そんなことか、くだらない。

「聞きたいのはその程度のこと？」

ティグレが高圧的に、けれどいつも通りを崩さずにそう言った。周りへの関心が薄く、オレ以外の全てに慳食とした態度で振る舞う、誰もが見るだらうあいつの姿。あいつは、ずっとそうだったと言うが、オレのことを好きになって以来明らかに変わってしまった。そうなる前からずっと見てきたから、なんとなくだけど、分かってしまう。

「19252 対 0、確かに圧倒的だったな。疑いたくなるのも分かるが、これが人間と俺たち Furhythm との実力の差だ。」

ティグレがそう続けた。オレがこんな風にさせてしまった。その感覚に度々苛まれていることをきくと誰も知る由もないのだろう。オレだけがこいつのことを知っている。俺だけしかこいつのことを知りえない。『こっち側』にはオレたちを知るやつは誰一人として、いるはずがない。いいいいはずがない。

「てかよ、ライブの盛り上がり方見てたらわかるんじゃない？オレたちの方を皆が求めた、ただそれだけのことじゃん。」  
仄暗い感情を隠しながらオレはティグレに同意した。

「それは……、そうなのですが……。」

歯切れが悪いながらも尚、インタビュアーは食らいつつこうとしてくる。めんどくさいな。

「それに、こんな結果、八百長にしても露骨すぎると思わない？」  
ティグレが放った一言に、一瞬の静寂が訪れた。それから同じ会社の人間同士で二、三言交わしあい、神妙な面持ちでこちらに向き直った。どれだけ強くなっても、オレはこの領域には至れないだろう。

「あいつらもお前らも可哀想だよな。なんせオレたちっていう頂点を知っちゃったんだからよ。」

オレが胸を張って言うのと、ティグレが肩を組んできた。さりげなくオレの胸を隠すように。顔を見るまでもなく、映すんじゃないぞという圧を感じる。カメラの角度が上向いたところでようやくティグレ本来(?)の顔つきに戻った。

「あれが頂点だとは思わないけど、俺たちに敵うやつらは日本中探し回ったところで見つからないだろうよ。だけど、もし挑む気骨があるなら受けてやろう、『Invasion of Furrythm』の舞台の上でな。」

「それ、まだ言っちゃダメなやつじゃ……？」

『Invasion of Furrythm』という言葉を受け、再び騒めきたず群衆。

その名の通り、『Furrythm』によるこの世界の音楽市場侵略を目的としたライブバトルが開催される。それはオレたちが『こっち側』に来ることになった根本的な要因の解明に必要なものらしい。というのも、ティグレや『向こう側』のスポンサーから聞いただけで、詳しいことについてはオレは全く分からない。

『向こう側』には俺らがやっつけることは伝わらないしいじゃん。それに、『こちら側』のスポンサーをつけるのにも早めの告知は必要だと  
思うけど。」

取ってつけた理由なくせに、なんかちゃんとしてそうなのがムカつく。

「とにかく、望むなら誰でも招待しよう。全員と戦い、勝って、今回の結果が真実だと証明してやろう。では、失礼。」

ティグレのこの宣言の裏にオレとティグレで別々の思いがあることは、まだオレしか知らない。

【Side : Tigret】

「つかれた。もう今日は事務作業もやりたくない。」

ライブ会場近くのホテルにて、俺はベッドに飛び込んでそう言った。それから大きなベッドの上を二転三転ゴロゴロゴロ。ヴォルフの横に並び立つのにふさわしくあるために後から入ってきたヴォルフが冷たい缶ジュースを背中に向けて投げた。ゴツという鈍い音が鳴り、痛みが後からやってきた。

「わりいわりい、なんか好きそうなやつ適当に選んできたけど。」

ああ、ファン相手には絶対見せない淡泊さも好きだな……。なんというか、その他大勢の有象無象共が何百万回転生しても見られない貴重な一面を俺だけが独占しているという感覚が最高に気持ちいい。

「ありがと、家宝にする。」

俺のことは嫌いなはずなのにこんなに優しくしてくれるのだから、その証を残しておくのは当然のことじゃないのか。それに、ヴォルフだけは最後までついてきてくれたから。終わりのないこの覇道の中で何一つとして風化させないためにも、小さなことだとしても思い出し

たいと思うのはおかしいことなのか。たった一人の大切な人からの施しを受けて……、

「おーい、戻ってこーい。」

ヴォルフの呼びかけに急激に意識が戻されていく。と同時に視界に入ってきた彼の裸に脳天を殴られたような感覚に陥った。『向こう側』でも体育の授業のときや衣装を着替えるときに何度も見えてきたものだけど、やっぱり好きな人の裸はエロいし何度見ても慣れない。

「寝んなら風呂入ってそれ飲んでからにしるよ。じゃ、お先に。」

前屈みになった俺の姿にニカを察したらしいヴォルフは、それだけ言って備え付けのバスルームに入ってしまった。俺はシャワーの音がしはじまったのと同時に脱ぎ散らかされた衣服に飛びつき、その匂いを鼻腔から体中に浸透させた。彼の華やかで甘みのある、柔軟剤由来の体臭と、激しいライブの後の汗の匂いが程よく混ざり合った、今日限りの一点モノの香りだ。成分を種類から比率まで死に物狂いで嗅ぎ分け、メモしておく。そしてこの匂いを再現して何度でも楽しめるようにする、Furythmとして活動するようになって新しくできた趣味なのだが、ヴォルフには絶対公言するなと口止めされている。言えるわけないじゃないかこんなこと。輸出入で関税がかかる量からオーバーした分をちよつと裏アカで高く売るだけにおさめているさ。

本当はやつちやいけないことなのは分かっているし、これまではなんとか自制できていた。職権乱用が許される立場になったからグレイゾンに押し戻せているだけでしかない。けど、やっぱりこれくらいはしてもいいよね。家事も俺がやっているんだから。

何回も彼の衣装を嗅いでいるうちに必要以上に身体中を駆け回る強烈な快楽に段々と脳を焼かれていった俺は、呼吸を荒げてより多くの匂いを取り込み、幾度となく絶頂した。理性も意識も失いかけた頃、バ

スルームの引き戸の施錠が解け、ヴォルフが下着だけのパンイチ姿で出てきた。

「ティグレく風呂上がった……、うわキツシヨ近寄らんとこ。」

ナチュラルにドン引かれた……。

ヴォルフは汗以外にもたくさんのが混じった異様な臭気に顔をしかめながら衣装を俺から奪還し、軽くもみ洗いをしてすぐさま洗濯機に放り込んだ。せつかくのヴォルフの匂いが……などと悲観するまでもなく俺はバスルームに投げ捨てられた。ドロドロとした雄臭さと生臭い汗が混ざった最悪な臭いが、アンモニアを直嗅ぎした時のそれを優に超える勢いで鼻に刺さってくる。俺はその原因となっている、オレの衣装に付着した粘性のある液体を洗い落とし、ヴォルフのものが既に入っている洗濯機の中に投げ入れ、洗剤、漂白剤、柔軟剤をそれぞれ分量で注いだ。それから体を入念に洗って水分を拭きとったタオルも一緒に洗濯にかけた。

ドライヤーをかけて体毛をフワフワでモフモフな状態にしてバスルームを出ると、未だに体が乾ききっていないヴォルフがパンイチのままテレビを見ていた。耳を震わせただけでこちらには見向きもしてくれず、だいぶ怒っていることが伺える。

「あー、ヴォルフ？……その、勝手に匂い嗅いでごめんな？」

おそるおそる近づきながら俺が謝ると、ヴォルフは自分のドライヤーを取り出しながら俺に横に座るよう促した。これで手打ちにしてくれるとでも言うのか。ご褒美でしかないのに！？俺は彼の胸や背中を撫でながら温風を当てていった。揺れる体毛の隙間から漂う彼の匂いに興奮したが、今回は匂いの発生源であるヴォルフ自身がいるため奇行に走れる程の度胸はなかった。

「なあ、ティグレ。」

ヴォルフが神妙な面持ちを取り繕って言った。本人としては真面目に話したいのだろうけど、耳と尻尾が揺れてしまっている。それをどんなに可愛いと思ったとしても、これから先に続く言葉に俺は必ずある終わりというものを感じずにはいられなかった。

「お前はいつまでオレのことを好きでい続けるつもりなんだ？」

「ずっと。たとえ喧嘩したりどっちかが先に死んじやったりしても、俺は死んだ後も、生まれ変わって今ある全てを失っても、ずっとお前だけを愛するよ。」

「はあ……。やっぱオレ、お前なこと好きになれねえわ。普通にない。」

「それでもいいよ。俺が勝手にヴォルフのこと好きでい続けるだけだし。」

「そうかよ。」

終始呆れた様子のヴォルフの姿を、俺は目に焼き付けた。こんな話ができるようになったのも、全部 FURRYTHM をつくったおかげだから。

FURRYTHM がある限り、俺たちは一生離れられない。そうなるように願ったのは、俺だから。